第２回「県政ひざづめ談議」概要

○開催日時：平成２０年５月１２日 １８：３０～

○開催場所：山梨学院大学

〔司会〕

ただいまから、知事対話の『県政ひざづめ談議』を始めさせていただきます。本日の進行を務めさせていただきます県の広聴広報課長、田中と申します。よろしくお願いいたします。

それでは始めに横内知事からあいさつをお願いいたします。

〔知事〕

どうも皆様こんにちは。横内正明です。それぞれお仕事を持って忙しい中ではありますけれども、こうしてご参加をいただきまして本当にありがとうございました。また、上甲先生も加わっていただいたということでありまして、本当に光栄にありがたく思っております。

この『県政ひざづめ談議』というのを年間２０回やろうということでありまして、これは凄い特別な肩書きがあるような方とかそういうことではなくて、普通のというか、それぞれお仕事に精を出しておられる県民の皆さんから、ざっくばらんに県政の課題について日頃お考えになっていることをお話を聞かせていただいて私が勉強させていただくと、そういう会でございます。したがいまして、もう今日は歯に衣着せずにどんなことでも結構ですからお話をいただければありがたいと思うわけであります。

とりわけ夢甲斐塾というのは平成１３年にできて、もう６年、７年が経つわけでありまして、それぞれ皆さん方が苦労して、自主的に運営をしていただいているわけであります。山梨を良くしようという志をお持ちになった皆様方でありますから、今日はきっと有益なご意見を聞かせていただけるものと大変楽しみにしております。

そんなことですから繰り返しになりますが、ざっくばらんに何でもいいですからお話をいただければありがたいというふうに思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

〔司会〕

本日出席しております県の担当者を紹介させていただきます。

まず、ＮＰＯや地域活動の支援などを担当しております相沢県民生活課長であります。

それから夢甲斐塾の発足の時の担当課でもありまして、それから中小企業とか産業に係る人材の育成などを担当しております飯沼商工総務課長であります。

それから新産業の創造、それから起業の支援を担当しております清水工業振興課長であります。

本日は夢甲斐塾の皆様方と『地域づくりを担う人材を育成するためには』をテーマに自分たちの住む地域をどうしていくか。そのためには人材をどのように育成していくかと、そういうような観点で話し合いを進めたいと思いますので、先ほど知事のあいさつにもありましたとおり忌憚のないご意見をお願いいたします。限られた時間でありますので、参加者全員の方が発言できるように是非ご協力をお願いいたします。

それでは自由に発言をお願いいたします。

〔参加者〕
若い創業者というか経営者を育成するために一つのアイデアとしてお聞きいただきたいです。
例えば情報プラザのような場所を、３ｍ×３ｍのスペースで月３万円程度で貸出しをしていただいて、若者が好きなお店を出せるようなシステムなどを作れないかなと考えております。特に情報プラザということに限ったわけじゃないんですけども、なるべくいろんなお店が密集した形で出店できるような形が取れればと思っております。
それはやはり、小売店を創業するにあたって保証金の問題ですとか、運転資金の問題など、非常に高いリスクを伴うと思うんですね。そのために創業意欲があったとしても現実的には中々実現不可能であるというところがあります。
また韓国の例なんですけれども、閉店した百貨店を細割りしまして若者にスペースを貸出し、個性と活気に溢れる店づくりにより、若者が集まる名所に生まれ変わったという例がございます。
日本の小売業の中小零細で成功しているのは、ほとんど今、実は若者の経営者なんですね。ですからそういった若者が自分で創業できるチャンスの場を与えていただくということが、また人材を育てるということにつながるんではないかなというふうに考えております。
メリットとしましては創業者の育成、甲府の中心街の活性化、あと若者に魅力あるまちづくりというところが挙げられるんではないかなと考えております。以上です。

〔知事〕
面白いですね、確かにね。ただ、情報プラザは近々壊しちゃうんですよ。耐震性がないものですから。
私、知事になってからびっくりしましたのは、県警本部が入っている建物が二つあるんです。これが耐震性がものすごく低いんですよね。そうすると山梨県というのは全国でも二番目に東海地震による危険性が高い所ですよね。地震が起こった時に警察なんていうのは、もういの一番に働かなければいけないのに、その本部組織が最初につぶれるんですよ。そんなばかなことがあっていいのかと。だから、やっぱり防災機能を担う所というのはしっかりした所に入れて、防災の時の救済の拠点にしなければいかんと思いまして、あそこに防災関係の警察だとか、あるいは教育委員会だとか、そういう組織が入る防災ビル的なものを造りたいと思っております。
したがってあそこはちょっと無理なんですけれども、そういう考え方は確かにあると思いますね。一番いいのは、やっぱり甲府市の中心市街地でシャッターで閉まっている所が多いわけですから、そういう所の店主さんが自分にはできないわけですから、そういう若い商業ベンチャーみたいなものに貸してくれればいいんですね。ところが貸さないんですね、困ったことに。要するに貸さなくったって裏で駐車場をやったり、家作を持っていてそこそこお金が入ってきているわけですから、全然貸すメリットがないわけですね。先祖

伝来の店を訳の分からん若い者に貸すわけにはいかんと、こういうことになるわけです。
　だから本当は、そういう人たちが地域商店街活性化のために若い商業ベンチャーの皆さんに安い家賃で貸せれば、これが一番いいですよね。それを甲府市と一緒に考えたり商工会議所と色々考えて、中々うまい知恵はないんですけれどもですね、まずそれを考えなきゃいかんと思っているわけなんですがね。
　同時にまた、おっしゃったように何かどこかやっぱりそういう若い人が入れるような商業スペース的なものを、まあ言ってみればインキュベーターみたいなものですね、そういうようなものをどこかに造ったほうがいいなという気持ちは確かにありますね。それは今後考えてみたいと思います。

〔参加者〕
　是非よろしくお願いします。

〔参加者〕
　私、歯科医院を経営しております。
　私、生まれは長野県の松本でして、縁があってこちらに来ました。地域のリーダーを育てるということで夢甲斐塾に応募したのですが、元々の動機というものは「出る杭を打たない」ということだったんですね。歯科医師会というのもすごく閉鎖的な世界でして、出ようとするとすぐ小突かれるというような組織に近いんですね。
　今、話があったような商業で出るというのもある意味出る杭になると思います。
　夢甲斐塾に入って、塾長と色々お話をして目からうろこが取れる思いをしたことが何回かあるんですけれども、叩かれるような中途半端な出方をするから叩かれるんだと。もっと叩かれないぐらいに出ちゃえば人は付いてくると言われたことがあったんですね。
　その時に歯科医師会であるセクションをずっと担当していたんですけれども、それはもう僕にしかできないようなことをしちゃおうと思って、もうどんどんやっちゃったんですね。オギノのリバーシティーで毎年イベントを開いているんですけれども、そこに関して僕がスペシャリストになりました。そうしたら周りの歯科医師会の人達は何も言わなくなりました。
　地域のリーダーになるというのは、そういうふうに叩かれても何か自分はもうこれならスペシャルで、ほかの人に有無を言わせないというような優れた自分の長所をいかしていくといいと思うんですよ。そういうのを伸ばすような夢甲斐塾のような塾ですね、塾長のような、ぽんとうまく後押しをしてくれるような私塾的なものをどんどんつくるというのも一つの手だと思うんですけれども。

〔知事〕
　確かにね、私塾的なものをですね。そうですね。
　つくるとしたら、県民の中からそういうものがどんどん生まれてくるような姿が望ましいですよね。
　県もいろんなＮＰＯが新しい仕事をやることについては、そう大きい金額じゃないんで

すけど立ち上がりの助成措置みたいなものはあるんですよ、いろんな制度が。
　だから皆様方が何か新しくそういう同好の士が、何かやろうということがあれば、単に無尽会じゃ困りますけどね、ただ飲んで騒ぐだけじゃ。やっぱりある特定の社会性のある目的があってやろうということであれば、いろんな支援措置というはあるんですよね。
　山梨というのは確かに内向き志向が強い県でしてね。周りが山に囲まれているせいかもしれませんが、この中だけで余り波風立たないようにしてやっていこうという雰囲気が強くて、そのことは良い面もあるんですよね。それが故にまたコミュニティというか、お互いの人間関係が濃密で、例えば山梨県の場合には少年犯罪の発生率が全国でも一番低いんですよね。これは依然としてコミュニティみたいなものが多少残っていて、自分の子どもだけではなくて、人の子どもも全体で見ていこうというような、そういう雰囲気があるんですよね。だから良い面はあるんですけどね。良い面はあるんですけれども、しかしやっぱり発展性がないという面はありますよね。
　だから皆様方のような方がどんどん思い切って、確かにその叩かれても思い切った活動をそれぞれの場でしていただければありがたいという気はしますね。
　具体的に私塾を県が作れというんですか。

〔参加者〕
　いいえ。夢甲斐塾でも色々構想がありまして、その辺はだれか、寺子屋とかありましたよね。あとちびっこ版の夢甲斐塾とかいうような構想を今練っていまして・・。

〔知事〕
　そういうものに対する立ち上がりの面での指導、支援とか、そういうようなことはできると思いますよ。

〔参加者〕
　もっと出る杭になって叩かれ強くなるというのも、こちらも大事だと思うんですね。

〔知事〕
　そうですね。

〔参加者〕
　横内知事は渡辺塾というところへ行ってらしたと伺ったんですけども、これはどういった塾だったんですか。

〔知事〕
　これは昔の話で昭和２０年代ですよね。お父さんが県会議員をやられた、渡辺勇三先生という方が起こされました。韮崎に戦後来られて剣道と、それから旧制高校を出ているものですからね、ある程度学問ができるということで、最初剣道を教え出して、それから親に頼まれて塾を開くことになったんですね。
　まあしかし「スパルタ教育渡辺の門」と言いましてね、竹刀を持っていてひっぱたかれ

るんですね。当時のことですからお金はないし、その建物も自分で廃材を拾ってきて教室を作ったんですね。だから冬なんかはもう八ケ岳下ろしが吹き込んで寒くてしょうがないわけですがね。

そういう所で、要するに志を磨いて天下国家に有意な人材となれと。まあこういうことですよね。非常に古い、かつての松下村塾（しょうかそんじゅく）ほどではないけれど、そういう古い教育者だと思いますけれども、まあしかし情熱というものは、教育の情熱というものは子どもたちにもみんな分かりましたから、みんなその子どもたちが慕って付いてきました。

しかし、ある時期から今度はそうやってスパルタ教育なものだから、全国から学校教育で落ちこぼれたというか、そういう子どもたちを受入れるようになったんですね。ちょっと塾の性格が変質をしていったんです。

しかし渡辺先生という人はものすごく情熱を持って一人ひとりの子どもを愛して、一生懸命でした。いじめじゃないんですね、陰湿じゃないんですよ。明るいんですよ。その代わり竹刀でお尻をピシャンとひっぱたくものですから、それは痛いことは痛いわけです。しかし決してサディズムでもなければ陰湿でもない。本当にその子どもの良いところを何とか引き出してやろうということが子どもたちに伝わりましたから、だから長続きしたということでしょうね。それは私なんかも本当に１年か２年だったんですけれども、やっぱり印象に非常に残りますよね。

〔参加者〕

ＮＰＯ子育て支援センターで「ちびっこはうす」で奉仕の仕事をしております。
昔から水泳のインストラクターをやっていて、子どもとずっと触れ合うことをしています。先ほどおっしゃられたように、今の地域も色濃いところ、つまり、みんなで、たくさんの親で、たくさんの子どもたちを育てようという地域もあれば、そういうふうにできずに引きこもってしまっている親もたくさんいます。何とか引っ張り出すということを私たちはやっているんですね。

小さいうちはいいんですけれども、その小さいうちの人材育成のやり方について、うちは代表が幼児教育者ですので、その教えというか、考え方にしたがってやっているんですけども、個人だとずれてきてしまうというところがあると思うんですね。色んな私塾を作り始めた時には、そういった教科書としてＰＨＰという出版社で「親学の教科書」というのが出ていて、それを是非皆さんに薦めていきたいなと思っています。

あと地域全体で子育てをしていくというのは本当に大事なことだと思うのですけれども、子どもが夜１０時以降に外で親と一緒にいたりします。例えばお風呂に行っていたり、居酒屋に行ったりとかしている人を沢山見かけるんです。それは本当に良くないことで、日本の子どもの睡眠時間は、世界の睡眠時間よりも３時間程度短いという話がありまして、この睡眠時間が短いから子どもが情緒が不安定になるという話も出ているんです。それが意見を吸収してくれる親でしたら多分正してくれると思うんですけれども、その話が届いてない親にとってはあずかり知らぬところで、県でももしできるならばそういった親御さんたちに声が届くような話を広報などで扱ってほしいです。

〔知事〕
　そうですね。この間もお話をさせていただいた機会がありましたが、子育て支援をやっている色々な団体も実はたくさんありましてね。確か「ちびっこはうす」の人もいたんですよね。
　色々と話を聞いて非常に面白かったんですけれども、本当に一生懸命みんなおやりになっていて、そういう中で幾つかのポイントというのが浮かび上がってきたんです。
　やっぱり子育てをしているお母さんを救う道というのはたくさんあるんだということが知られてないんですよね。知らないで一人で子育てを悩んでいるお母さんというのは依然として非常に多いんですよね。
　そういう人たちをそういう所に引っ張り出してやると、それだけでもああこういうのがあったかという非常に喜ばれるらしいんですけどね。それをまず知らしめてやるという、いろんな仕組みや制度が、まあボランティアもあれば、あるいは市町村もやったりしているのがあるんですけど、そういうのを教えてやらなければいけないですね。それが大事だと思いましたね。おっしゃるとおりですね。
　それで確かにその１０時頃にならないと眠らない、睡眠時間が短いというのはそうかもしれませんね。何にしても早寝・早起き・朝ご飯ということですね。これが学力を高めるには一番だそうですね。

〔参加者〕
　ただ親御さんが知らない場合も多いんですよね。

〔知事〕
　そうでしょうね。そういう情報というのを、この間も話したけど、新聞も見ない、テレビもあんまり見ないというような人に知らしめるというのが難しいですよね。それを何とか考えてみようかと思っているんですけどね。がんばって下さい。

〔参加者〕
　がんばります。

〔参加者〕
　山梨大学の中にございますただ一つの産学連携企業の「フォーガ」に所属しております。その立ち上げで新会社法を使わせていただいて、６月スタートの会社法だったのですが、６月２日に創設しまして、今そこで働いております。システムウェア、システムとか情報発信を機軸にした会社なんですが、技術者は山梨県人を雇用して技術の底上げを図ろうということで山梨大学と連携してやっております。
　その中で話題になっておりますのは、産学連携というのは山梨県の中で最近は余り聞こえなくなってしまっているということです。
　もうひとつ、『観光立県やまなし』ということで、観光をアピールするようなシステム

を作りたいということで、でもそれをシステムだけをやったからといっていいわけではないので、３月８、９日の中央商店街の活性化のイベントに係わらせていただきました。それはボランティアを主体としたＮＰＯ法人がまだ通っていないＮＰＯの組織で、山梨広域活性化協会というふうにＹＳＴという通称を持って地域の経営者、会長職、あと高校生、大学生と共に係わっておりました。

その産学連携のことと、あと観光立県のことについてちょっとお聞かせ願いたいんですが。

〔知事〕

観光立県ですか。産学連携は一生懸命やっているつもりなんですが、余り目立ちませんかね。

いろんな産学連携の支援措置もあったりしましてやっているんですけれども、ただまあ山梨大学も今非常に開かれて前向きにやっていただいていますよね。ただ、やっぱり先生方のある種のキャパシティみたいなものがあるものだから、何でもかんでもということはできないんでしょうけれども。これは幾らでもやっていかなければいけないことだと思っているんですがね。余り最近一生懸命やっていないかな。

〔工業振興課長〕

そんなことないです。（笑い）

〔知事〕

鐘、太鼓でやっているような感じでいるんですけどね。余り目立たないんですね。

〔参加者〕

相談窓口を分かりやすくしていただければありがたいかなと、社員の身分としては思いいます。

〔知事〕

観光立県、これは大事なことで、ただ事柄が大きいですから何を申し上げていいのかちょっと分からない、それは大事なことですよね。

〔参加者〕

情報発信のところで・・

〔知事〕

情報発信をね。まあ一生懸命に私もやっているつもりなんですけどね。去年は「風林火山博」、「大河ドラマ風林火山」があって、したがってあれは１０％伸びたんですがね。今年も今、デスティネーションキャンペーンというのをＪＲとやっていて、大体去年と同じぐらいのペースですし、特に去年は外国人観光客が３０％増えまして、私も毎年中国に行ったりしてやっているんですけどね。

山梨というのは、何といっても富士山があるものですから、非常に向こうの方々は魅力を感じてますね。行ってみて中国にしても韓国にしても、東南アジア各国というのは非常にバイタリティーがある、エネルギーがあるわけです。日本の国内の観光客を一生懸命引っ張ってきても、やっぱり人口が減っていますから、全体として需要はそんなに増えていないわけで、国内の観光客を一生懸命引っ張ってもそんなに大したことはない。やっぱり東南アジアとかの富裕層が大幅に急速な勢いで増えているところは、あっちのエネルギーをいかに持ってくるかですね。それが一番ポイントの一つだと思いますよね。そういうことなんですけどね。

〔参加者〕
富裕層ねらいで。（笑い）

〔参加者〕
まずその地域づくりを担う人材を育成するために、地域づくりを担う人材がいるかどうかということだと思います。例えば山梨県出身の方が東京の大学に行った時に、「あなたどこの出身ですか？」と言われた時に、「私は山梨県のどこどこ出身です」と胸を張って言える方が県民の何パーセントいるかなと思うと、ずいぶん少ないんじゃないかなと私は感じます。

もちろん、それは私が感じているだけで実際はどうか分かりません。けれども、なぜ胸を張って言えないのか、誇りを持てないのかという部分については、この会でもよく議論が出るんですけど、まず山梨のことを知らない人たちが大勢居過ぎるんですね。

私たちもこの夢甲斐塾に入って、塾長から色々教わりながら、本当に素晴らしい先人がいるということを教わって、ああやっぱり山梨ってすごいんだということをまず勉強しました。山梨を知るということがまず第一歩というふうに捉えています。それはこちら側が教えるんでなくて、塾生たちが１年間何をしようかというふうに考えた時に、まず知ることから始まるんですね。そして山梨を知らないと山梨を愛することができないというふうに思うので、是非子どもの頃から山梨のことをもうちょっと自分の住む町のこととか、山梨県出身の偉大な人とかというようなことを教育することがもうちょっと大事かなと思います。

あとは山梨を好きになっただけだと誇りは持てないと思うんですね。じゃあ誇りを持つためにはどうすればいいかなと思うと、山梨のために自ら自分が何か汗をかいたかどうかということだと思うんですね。そうすることによって多分山梨に対して誇りが持てる。誇りが持てた人はきっと地域づくりを担う人材になり得るだろうし、自ら山梨をもっと良くしていきたいと思うと思います。

あと県庁職員の方と県民の方が、もっともっと交流する場面があってもいいかなと思います。たまたま県庁の広聴広報課の方かな、得々クラブというのを今メールでやっていて、今会員がずいぶん多いんですけど、ものすごい良いことだと思います。

〔知事〕
私も時々見ていますけど面白いですね、あれね。

〔参加者〕
ごひいきにして下さいというか、バックアップして下さいというか・・。昔も県庁の職員の方と民間の方の交流する場面が何年間というような形で多分あったと思いますので、そういうことも大事かなというふうに思います。
あと、地域づくりを進めていくと必ず壁にぶつかって、それは何かというと行政に対する壁なんですね。そのためにじゃあどうするかというと、本当の目的を達成するためには議員になるしかないんですね。議員になるのに山梨の選挙は非常に辛いものがあって、理想だけでは選挙は勝てない。知事さんも何回もやっているから・・（笑い）何かお金のかからない、しがらみのない選挙ができるようになったらいいなと思います。
私も今４２歳ですけど。

〔知事〕
そろそろいいですね。

〔参加者〕
いやそういうことではなく（笑い）。
この年になるといろんな良い噂、悪い噂、お金の噂、利権の噂というものを非常に聞きますね。
だから何て言うのかな、まったく話変わりますけど納税貯蓄組合というところで子どもたち、中学生に税の作文を書かしているんですよ。そうすると子どもたちは、大人になったら責任ある税の納税者になりますみたいなことを皆さん書くんですね。でも大人に税をちゃんと払ってない人たちがいるから、学校を卒業してから、あっ払わなくていいんだというような雰囲気になっちゃうんですね。
私たちはもう大人になりましたけど、自分たちも自ら変わらなければいけないだろうし、大人の理論に流されないような、ちょっととんがった人間になるかもしれませんけど、そんなつもりで生きていきたいなと思っています。

〔知事〕
ありがとうございました。
確かにおっしゃっている意味は私もよく分かるんですよね。私も３０年間東京にいたことがありますからね。「あんた、どこ？」と聞かれて、「山梨です」と胸張って答えられるかですね。「いえ、まあ・・」と言って口を濁すか・・。
しかし私もずっと東京にいて、昭和５０年代の後半ぐらいから胸を張って「山梨です」と言えるようになったんですよ。それはなぜかというと、やっぱりミレーの絵で山梨はこれはもうすごい文化の高い県だとか、何か色々あの頃から山梨がずっと文化的にもいろんな意味で非常に東京から見ても輝いていたんですよね。そういうことがありましてね、自分の郷里に誇りが持てたということでしょうね。やっぱり自分の郷里に誇りが持てるかど

うかということだと思いますよ。
　埼玉の人が一時、私は埼玉出身と言うのを嫌がったんですね。ところがその後、「彩の国さいたま」なんていって一生懸命やり、今はもうそんなことはありませんよね。だから誇りを持てるかどうかですよね、確かにね、おっしゃるとおりです。
　その山梨の教育、郷土教育というものをやらなければいかんというのは、これは今度副読本を作ったんですよね。今学校に配っているんです。小学校用の副読本と中学校用の副読本がありましてね、これは是非もし・・。

〔参加者〕
　これは僕たちも一緒に勉強したい・・(笑い)。

〔知事〕
　読んでみて下さい。私も全部読みましたが非常によくできている。１年掛かりで一生懸命作っただけのことはあって非常によくできているんですがね。これを全学校に配ろうとしているんですけどね。
　まあ、議員は、山梨の選挙というのは甲州選挙って独特なんですけれども、もうそれはほとんどなくなってきたと言っていいと私は思いますよ。金なんかない人だって当選できるんですよ。そういう人はなんぼでもいますよ。要はやり方です。やっぱり情熱と期待感ですよね。そういうものを有権者に与えられれば当選できるんです。
　そういうものを持てない人が一生懸命お金を配ったり、血縁を使ったりするんであって、もう利権だとか、そういう金権選挙だとか、そういうものは、だって誰もそんなお金ありませんからね。それに選挙違反で捕まるほうがばかばかしくて仕方がありませんから。もうそういうことはないです。
　だからあなたが何に出られるか知りませんけれども（笑い)。知事選に出てもらってもいいんですけども（笑い)、そんなことは余り気にすることはないですよ。
　しかし仲間は必要ですから、やっぱり仲間は作らなければいけませんね。しかし仲間を燃えさせるような魅力があなたにあるかどうかが先ですよ。それさえあれば必ず当選しますよ。マスクはいいし（笑い)。

〔参加者〕
　私は山梨大学大学院を卒業して、この４月から職員になって、正に産学官連携の所にいるんです。
　最近徳育ですとか、それから環境を守るとか、昔の生活を大事にするとか、そういう動きがあり、それはすごく大事なんですが、一方で科学技術なしには私たちはもう生きていけないような時代になっているのは確かなことです。科学技術はすごく著しく進歩しているんですけれども、今は研究者とか科学者だけがその研究、科学のことを考えていて済む時代ではありません。生命倫理のことにしろ、あるいはインターネットでの問題にしろ、もうみんなの問題なんです。報道にもあるように「理科離れ」をしているとか、「理科離し」とか親も理科を離れているし、もう大人自体が離れているから子どもから理科を離し

ていると表現されます。
　そういう現実があって、そういうのを少しでもなくしたいと思って大学院生の仲間とサイエンスチェストというチームを作りまして、この「ひざづめ談議」のように、研究者の方を知事さんの席のところにおいて、気楽に談笑する会なんていうのを最近始めたところなんです。県でも、知事公舎を新エネルギーの研究の場に提供して下さったりとか、あるいは小学校なんかに理科支援員を派遣するお金を出していただいたりして支援して下さっていることは少しは存じ上げています。
　しかし、そういう状況を少しでも改善する方法として、一つは研究者と地域とか、あるいは子どもたちを結ぶ活動に何か支援をする必要があると思います。科学館とかでも一生懸命やっているんですけれども、科学館は遠いんですよね。中高生は交通手段が自転車しかないんですね。美術館も遠い、博物館も遠い、みんな交通費は高いと。親は乗せてきてくれないと。そういうところで何か機会をつくる、そういう活動もバックアップしてほしいというのが一つあります。
　もう一つは、やはり研究者として輝く研究者がいると、ああ私も続こうというふうに思うと思うんですね。医学部のお医者さんにはたくさん支援が来ているんですが、一般の研究者になるにもすごくお金が掛かります。私も大学から支援を受けましたが、自宅から通ったのに博士課程までに３００万ほど借金が残っているんですね。だからそういった意味でも研究者を育てる何か支援を県からしていただけるとありがたいなと思います。

〔知事〕
　博士号を持っているんですか。

〔参加者〕
　この４月に、名前だけですけども。

〔知事〕
　博士号を持っていても、なかなか難しいそうですね、最近はね。

〔参加者〕
　本当にそうなんです。だからすごいお金を掛けて育てていただいたのに、働く場所がないというのは本当にもったいない・・。

〔知事〕
　企業が博士を求めないんですよね。

〔参加者〕
　大学の教育システムを企業としては必要としていないと思うんですが、ある意味では、県とかが企業とかとタイアップ教育などの中に入り込んできていただくのもいい一つの提案だなと思っています。

〔知事〕
　ついさっき議論していたんですけれども、山梨大学と企業と県と一体になってものづくりに携わる技術系の人材をどうやって育てるか、それをどうやって山梨に定着してもらうかというような仕組みをつくろうと思って議論しているんです。是非そういうことをやろうかと思っているんですよね。
　それから研究者と子どもを結び付けるということは非常に大事です。大村智先生という、北里研究所の名誉理事長さんですが、立派な方がおられまして、この方がご自分でお金を出して山梨科学アカデミーというのをつくっているんです。この科学アカデミーでは山梨大学とか山梨学院大学とか、そういうところの研究者の先生方を小学校とか中学校とか高等学校に派遣をしているんですね。行くと非常に子どもたちが喜んでくれるらしいんですが、１学校年間１つ当たらないんですよね。もっとたくさんいろんな研究者が学校に行って、子どもたちに科学の面白さというやつを教えてもいいんじゃないかと思うんですよね。

〔参加者〕
　次にその中に大学院生とか大学生を・・。

〔知事〕
　大学生とかね博士をね。総合的な学習の時間なんかにそういうことをおおいにやったらいいと思って、これは是非そういうふうにしようかと思っています。

〔参加者〕
　よろしくお願いします。

〔参加者〕
　今の関連で、県外から山梨に来た大学生が、学生のうちに山梨のことが好きになって、山梨に就職したという方を私は何人か知っていますけど、やはりちょっとさっきの繰り返しになりますけどそんな部分も大事かなと思います。

〔参加者〕
　かねがね思っていることがあります。日立とか東京エレクトロンが僕の家の周りにあります。若い女性がいて「いい旦那がいないか」と頼まれることがあるんですね。でも、若い人がいないんですね。いても、夜仕事も遅いですし。
　人がいない理由を聞くと、遊びに行く所がないから若い連中は出ていっちゃうというのがあるらしいですね。やっぱりこっちに赴任したがらないというのもありますから、技術者を残すというのは、夜出られるインフラ整備とかがですごく大事なことになると思うんです。

〔知事〕
若い人が魅力を感ずるようなまちづくりというのは必要ですよね。今、若い人が魅力を感じるようなものはないんじゃないかと思いますね。それはそのとおりだと思います。

〔参加者〕
小笠原流礼法の師範をしております。ちょっと話が戻ってしまうかもしれませんが、山梨に誇りを持つということでは、私はこの小笠原流礼法というものに出会って非常に山梨県人としてとても誇りを持って今活動をしております。
ご存知でいらっしゃると思うんですが、小笠原礼法は日本の礼儀作法の基になったもので、それが山梨県の小笠原が発祥ということで、全国では非常に知られているんです。残念ながら山梨県内では余り知られていないということで、私はその普及活動に自分の人生をかけようと思っているんです。それを通じて子どもたちに礼儀作法ですとか、あと小笠原流は「人を思いやる心」、「弱いものはいじめない」、「上の方々は尊敬する」というものが根本にある、武士の作法なので、そういったものを子どもたちに教えていきたいのです。
「山梨の人だから礼儀がきちっとできていらっしゃるのね」「山梨からお嫁さんをもらったの。それはいいお嫁さんが来たわよ」となるような、ちょっと言葉は悪いかもしれませんが「山梨県人ブランド」ということを、生涯かけて活動できたらいいなと思っています。
今は南アルプス市の小学校で、卒業証書を小笠原流で受け取ったりするところから地道に始めているんです。地道に活動していって、いつか行政の方々に協力をしていただいて広めていきたいと思っています。今は自分の力でがんばっていこうと思っています。
その中でやはり道徳教育というものが大切になってくると思うんですが、地域独特の道徳教育というものがあってもいいと思うのです。ちょっと武士の作法と言うと色々問題が出てくるかもしれませんが、知事は道徳教育に地域独特のものを取り入れるということについていかがでしょうか。

〔知事〕
具体的にどういうことですか・・。その前に小笠原礼法の一番の、例えばどんなことですか、この礼法というのは。例えば証書を受け取る時に、何か一応、型があるんですか。

〔参加者〕
もちろん型というのがあるんですが、根本にはやはり「慎みの心」というのがあります。
きちっと軽く頭を下げて頂戴するというのも、ただ形だけではなくて、なぜ頭を下げるのかというと、やはり校長先生に６年間ありがとうございますという慎みの心があるのです。今とても失われていることです。
とにかく相手が今どう思うかということを前提として行動をするという考えが作法の根本にあります。

〔知事〕
まず心構えなんですね。
道徳教育といっても知育、徳育、体育と言っていますから、やはりそういう心の側面というのは非常に大事だと思いますよね。それが欠けているようなところはありますけれども、まあしかしさっき言ったように道徳教育というのは余り学校で教えるというものではないと思います。そういう人間としてやってはならぬこと、やるべきことというのは家庭だとか、それから特におじいさん、おばあさんとか近所の人とか、それから子どもたち同士の遊びの中で自然に覚えていったもんですよね。今は学校で一生懸命教えているわけです。
今私がこうやろうとしていることが一つあります。学校というものは先生が今すごく忙しくて疲弊しているわけですよね。大変です。だから地域全体が学校を地域の宝物として支えていく。そしてその地域全体を見回してみると先生のＯＢなんかいたり、警察官のＯＢなんかいたりするわけですね。そうしたら先生のＯＢは時々学校へ来て現役の先生を助けてやったり、警察官のＯＢがいたら時々学校を見回って安全を確認してやったりとかですね、周りの人がみんなで庭木の剪定をしてみたりとかする。そしてあなたのような方がおられれば、時々行って子どもたちにそういうことを教えたりする。そういうふうに地域全体が学校を支えていく中で、道徳教育とは言わないけれども、自然と人間としての心というのは育っていくんじゃないかという気がしますよね。それが大事で、何か教科書があって教えればというものじゃないと思いますから、そういうふうにしようかと思っているんですがね。

〔参加者〕
それが一番私も理想だと思うんですが、学校と地域と行政とが、３つがうまくというのが中々難しいと思うんですが・・。

〔知事〕
そうですね。だけどそれはやっていかなければならないことで、文部科学省もそれをようやくやり始めたんですね。だからそれをもう一回やるということでしょうね。

〔参加者〕
機会がありましたら是非お声をかけていただきたいと思います。ありがとうございました。

〔参加者〕
うちには自閉症の子どもがいまして、それで知的障害の方たちの支援に力を入れているんです。北杜市に住んでいますが、北杜市は環境に力を入れているんですが、この頃段々と知的障害のほうの勉強をずいぶん地域にも広げようという活動が出てきています。この前の研修会というか、講演会にも北杜市長もみえて、段々と行政というところにもやっと少しずつ広がってきたんです。

どうしても先ほどの話のように、地域全体で子どもを育てることが必要です。例えば、目が見えなかったら点字ブロックは必要ですよね。知的障害の場合は、物ではなく理解なんですよ。何かが必要というものではなく、皆さんがこういう子たちはどんな感じだということを知っていただくというのが一番の福祉につながるんですね。

先進国の、それを先駆けているところは、学校に入った時にまずＤＶＤで１５分ほどそういう子たちのビデオを見せるそうなんです。目が見えない人が点字がないと迷うように、その子たちは適応させるんじゃなくて地域が理解してないとゆっくりというか、安心して暮らせない状況があるということを知ってもらうことが大事なんですよね。

それで、是非県としても福祉というものにちょっと力を入れてほしいのです。いろんな障害がありますが、知的障害のような人たちにも学校教育じゃないですが、そういう福祉教育にも少し力を入れてほしいです。是非とも山梨県は福祉にも力がとても入っているというのを全国的にも知らせていただきたいのです。

やっぱり私たちみたいな保護者からすると、他の県のいろいろな情報が入ってくるんです。あそこの県ではこういう所に力が入っているよというと、もう本当に引っ越してでも行きたいとか、そんなようなせっぱ詰まったところがあります。是非とも山梨県も目に見えない障害に対していろんな教育とか、そういうものに力を入れていただけたらありがたいなということです。よろしくお願いします。

〔知事〕

分かりました。障害を持っている方の親御さんというのは本当に、話を聞いていてもまったく切実というか、段々子どもさんが大きくなって、またご自分は年を取っていかれるわけですから大変ですよね。山梨県も前の知事の代から、例えば、あけぼの医療福祉センターだとか、青い鳥福祉センターとかの整備をしたりとか、福祉的な施設は優先してかなり造ってきているんですよ。

しかしもっとそういう今のソフト的なことも含めて、広くは県民の皆さんの理解ですよね。

〔参加者〕

そうですね。そちらのほうの広報を是非とも少しでも力をいただければ。知的障害で言えば、「点字ブロック」に代わるものが「理解」ですね。そちらのほうの教育、それがやっぱり子育てにつながると思いますけど、いろんな子がいるということを知っていただくというところから始まると思います。是非行政としてお願いします。

〔参加者〕

先ほどの子どもたちに対する徳育教育に関連して、夢甲斐塾のみんなで少し考えたアイデアがありますので、それを少しお伝えさせていただきたいと思います。

今、社会の問題として子どもが少ない。現状、実は私も子どもをつくっていなくて、それはいろんな理由があるんですが、一つの理由として、やはり経済的に女性が子どもを産んだ後に社会に復帰しづらいということがございます。

そこで現状どういう課題があって、どういうやり方があるかということを考えた時に、今甲府とか山梨で学校が非常に空いている部分があると。廃校になった学校があるので、そこを利用して子どもたちを夜遅くまで預かっていただくようなシステムがあればいいなという発想が生まれました。

そこで見てもらう内容なんですけども、講師とか先生は定年退職した先生方もしくは保母さんですね。そういった方々に、まずはやっぱり学校の宿題などをみてもらったり、また徳育になるんですけれども、俳句ですとか古典に慣れ親しんだらいかがかと思っております。

そのための交通手段というのはまた少し問題になると思うんですが、山梨にいますとどうしても交通手段というか、バスのインフラが弱いなと思っています。そこで各市でやっているコミュニティーバスなんかを少し強化してもらって、送り迎えの手段として何か利用できたらなと考えています。

そういったことをやって、女性が子どもを産んで働きやすく、定時まで働きやすくできるような環境を整えていただけたらと考えさせていただきました。

〔知事〕

まあそれは学童保育の問題なんですよね。学童保育というのはかなり今やっているんですね。放課後子ども教室だとか、それから厚生労働省のものと文部科学省のものがあってよくごちゃごちゃするんですけれども、ずいぶん今は広がってきて、基本的には廃校でなく、それぞれ今ある学校の放課後の校舎を使って、そして先生方がやったり、あるいは臨時の教員の先生がやったりとか、あるいは保育士さんもそこにもちろん入ったりしてやっている例が多いんですよ。

それで今のような廃校を使ってというようなことがあるいはあるか、確かに今ある学校でなくて、それ以外の所で、例えば児童館とか、そういうような所でもやりますからね。あるいは廃校みたいなこともあるいはあるかもしれませんが、学童保育を充実して、できるだけ夜遅くまでやるということなんでしょうね。それで大体カバーできるんじゃないかなという気がしますけどね。

何かそういう実態をお調べになって、今の学童保育のやり方ではどうもうまくないというようなことがあるんならば別なんですけども、私なんか聞いているのは学童保育、確かにもっと時間を延長してくれということはありますよ、確かにね。それはあるんですけど、まあ晩飯を食べさせたりとか、そういうようなことは中々難しいんですよね。

まあしかしそれも含めて、そういう子どもさんを面倒みようという、先ほどのような子育てサークル、グループというのはたくさんありますから、そういう方なんかも来たりして、まあ今すぐできるかどうかはともかくとして、将来としてはそういうことはあると思いますね、確かにね。

〔参加者〕

私、大月で高齢者支援のＮＰＯの活動をしております。

ちょっとそういった部分も係わっているということもあるんですけれども、知事は山梨観光立県ということで、非常に大々的におっしゃられているんですけれども、観光というとやっぱり人がたくさん集まる。けれどもそれで結局流れていってしまうということで、山梨の人間が増えるというところまでいかないと思うんです。

そこで、私、今高齢者支援だとか子育て支援の活動に係わっている関係で、県外から、あるいは日本国外からでもいいと思うんですけれども、いろんな人が山梨に楽しく住んで暮らせる、そのための何か方策、それには一つには福祉だとか医療の充実ということも欠かせないのではないかなと思うんです。

例えば、乳幼児の病院窓口の無料化だとかという部分では、お母さん方が子どもの医療ということに関して非常に安心していられる部分だとは思うんですけれども、例えば高齢者の方たちも安心して、楽しく老後を過ごせる、そういったものを県としてももっと観光立県ということのほかにプラスアルファで積極的に打ち出していただけたらなと思っています。

そのほかに再三今日この場でも出ているんですけれども、教育ということも係わっていってくれれば、山梨にもっと多くの人間が、多くの人たちが安心して楽しく移り住んでくれると思いますし、山梨で生まれ育った人間が、また山梨に戻って自分たちで生活を築いていこうというふうになっていくと思うんですよね。ということを私は期待したいと思っているんです。

〔知事〕

まあ確かに人口は減っているんですけどね。しかし日本全体が人口が減少に入りましたからね。恐らく１５年後には東京都だって人口の減少になってきますからね。山梨だけ人口を増やしていくというのは現実問題として中々難しいと思いますね。

だから、まあ言っているのは観光だとか、あるいは二地域居住というような形で、いわゆる流動人口というか、交流人口というか、そこの定住人口じゃないんだけれども来る人はいると。そういうものを増やすということはあるかということで、観光とか二地域居住というようなことを言っているわけですがね。

福祉や医療や教育を充実すれば確かにそれはいいんですけれども、中々それだけでは人口を増やすということが難しい。

基本的には、やっぱり魅力のある就業機会というのがまず第一にあるわけですよね。正直言って人口を増やすというのを目的にするということは、今の山梨としてみればちょっと実現可能じゃないんじゃないかなという感じがしますね。

そういう目標を作ったとしても現実問題それができるかというと、これはもう軒並み減ってくるわけですから、どんどんどんどん。その中で山梨だけ人口が増えるという状態は中々難しい。医療とか福祉とか、そういうものを充実すればと言うんですけれども、医療や福祉というのはご承知のように非常に大きな全国的な仕組みで国が作って動いているものですから、そういうものに対して山梨が特別なものをやるというのは、これは巨額な財政支出を必要としますからね。まあ中々簡単にはいかんだろうと思いますがね。

しかし、人口は増えないけれども、二地域居住とか、私は大月なんていうのは二地域居住にいい所じゃないかなと思うんですよ。特に上のほうの七保、七保って知ってますか。

七保はいい所だなと思ってね、広い所でね。ああいう所は二地域居住なんかじゃいい所だと思いますね。

〔商工総務課長〕
　ちょっとよろしいでしょうか。総務省の統計局の調査なんですけれども、今年、住宅土地統計調査をやります。これは５年ごとに調査をしているものです。この平成１５年の調査の結果によりますと、実は山梨県内の別荘の数というのは日本第４位なんです。

〔知事〕
　それは人口当たりですね。

〔商工総務課長〕
　いいえ、棟数です。日本４位なんです。今度住宅の総数に占める別荘の割合でいいますと山梨県は日本一なんです。
　ですからそういう意味で言いますと、今知事が話されましたけれども、二地域居住というのはすでにもう山梨県の中の、特に多分北杜市と富士河口湖の近辺でしょうけれども、そういう格好でかなり進んでいるのかなと。そこに来る方々をどういうふうに山梨県の中でもてなしをして、それを山梨県の活性化につなげていくか。この辺がやっぱり重要なことだという感じがしていますけどね。

〔参加者〕
　やっぱり北杜市はよその県から来られた方が多くて、それも結構面白い方が多くて、先ほどの活動が段々活発化したというのもやっぱり外から来られた方がすごく熱意がある方たちで、そういう人たちの活動の場をいっぱい作っていただけると・・。

〔知事〕
　最近は、地元の人と交流するようになりましたね。例えば柿澤さんなんて、元外務大臣ですが、あの人なんかは長坂のこの町の田舎に作りまして、そしていつも来てこっちに住民票をおいてやっていますよね。そういう人が増えてきたんですよね。

〔参加者〕
　これから空き家が増えると思うんですけれども、そういったことについて何か計画というのはあるんでしょうか。

〔知事〕
　空き家が増えることへの計画というのはないですね。どうしようもないですね、これは。

〔参加者〕
空き家が増えた時に何かに使うとか、多分そういうものって多分犯罪が起きやすいし。

〔知事〕
それはそうですね。

〔司会〕
市町村では空き家バンクを設けて東京から来る方に貸すとか、売るとかいうことはやっていますね。

〔知事〕
田舎の風情のある空き家はいいんですが、しかし、都会の空き家というのは、まず賃貸住宅の悪いものから空き家になっていくわけでしょう。古いものが空き家になっていくわけですね。これはどうにもならない。やっぱり居住水準が上がっていく中で、悪いものはそうやって淘汰されている現象ですから、それは中々難しいですよね。

〔参加者〕
その空き家になったところを引継ぐ人がいなかった時に、県のほうの所有物になると聞きましたが・・。

〔知事〕
それは相続する人がいない時は国のものになりますね。

〔参加者〕
夢甲斐塾で話をしていた時に、街中などの中心のほうは自然環境がまったくなくなってしまったとすごく心配をしていて、子どもが蟻を見た時に怖がるとか、小さな生き物がもう自分とまったく違う世界のものだということで、自然とまったく違う世界で生きてしまっている子どもたちが増えているという心配があるんです。
もしそういった空き家が増えた時に、県のほうで、極端な話、空き家をつぶしていいんだったらそういったところは空き地にしていただいたりとか、自然に戻していく作業というのはできないものか・・。

〔知事〕
それはありえますね。ただやっぱり何かどうか持ち主がいて、持ち主がそんなものに提供、ただでどうぞ使っていいよというようなことにはならんでしょうね。

〔参加者〕
仕事は経営コンサルタントをしておりますけれども、こういう格好（和装）をいつもしているんです。（笑い）なぜかと言いますと、今日のテーマが『地域づくりを担う人材を

育成するためには』というテーマなんですが、そのためには私はやはりトップのメッセージというのが一番効くと思うんですね。つまり知事からのメッセージです。

私自身は、実はこういう格好を意識してしているんですが、夢甲斐塾で色々勉強していく中で私自身になかった私たち日本人の古き良き伝統といいますか、いわゆる儒教、仏教、神道というものを中心にした私たちの心のあり方ですか、そういったものが戦後の教育の中になくなってしまい、私自身も今まではまったく勉強してまいらなかったわけです。最近独学で「論語」であるとか、「大学」であるとか、あるいは仏教の教典であるとか色々勉強する中で、やはり私たち日本人にはこういうふうな考え方が一番合っているし、それが一番すっきりするというか、すっと落ち着くだろうと思っています。藤原正彦先生がおっしゃるようなことが、すごく私たちの日本人という民族に合っているように思うんですよね。

知事さんが知事になられた後のすぐのメッセージの中で、佐藤一斎の言葉を取り入れられて、「春風をもって人に接し、秋霜をもって自らを粛む」という言葉がありました。その頃ちょうど私勉強を始めていたんで、ああこれは確か佐藤一斎だなというふうに気が付いたんですけれども、やはりトップの方がそういう時に発するその片言隻句というか、短い言葉というのが非常に私は影響をすると思うんですね。そういう東洋の根本的な思想みたいなものを私はもっと必要だと思っておりますので、是非知事の言葉の中にそういう言葉を取り入れていただきたいなと、そんなふうにお願いいたします。

〔知事〕

そうですか。分かりました。まあそれは座右の言葉ですから言っただけのことですけれども・・。

〔参加者〕

あともう一つ、失礼なことかしれませんが、一つ是非お聞きしたいなということがあります。

知事は日本で一番いい大学を出て、その後官僚になられて、そして国会議員になられたと。ですから端から見ていると非常にエリートコースを歩んでこられたと思います。ただ知事選に出馬をして、初め落選されて、そしてまたチャレンジしたと。その落選する中で知事を支えたものは何だったのかというのを是非お聞きしたいです。

〔知事〕

やっぱり人間の情ですよね。ともに残念がってくれる人が非常に多かったということですよね。やっぱり一緒にもう一回最初の思いを忘れずにやろうよと言ってくれる人が非常に多かったということですよね。４年間ずっと暇なものですから、あっちこち歩きますよね。歩いていると本当にもう一回やろうよと言ってくれる人が多かったということでしょうね。

まあもう一回やってまただめでもこれはしょうがないのであって、そういう期待とか、そういうものがある以上は、これはやっぱりもう一回やらざるを得ないなと思ったわけですね。そういう人間の情ですよね。

〔参加者〕
　やっぱり人、人材のという話をされていた、今回のテーマがそうですね。人材の育成をということをテーマにされていると思うんですけれども、最近ですけど、韮崎の清哲に住んでいる友達に子どもが生まれたんですけど、非常に韮崎には産婦人科が少ないという話をされていました。やっぱり人を育成する前に、まず人がいないとならないかなと僕は思うんですよね。そう考えると非常に産婦人科というものが少ないというのはマイナス面ではないかなと思います。人材を育成する前に、まず子どもが生まれる環境というのを整えるのは重要ではないかなと僕は思うんです。

〔知事〕
　いや、本当、そのとおりですね。困るよね、あの産婦人科というのは、小児科もですが・・どうしようもないじゃないですかね。まあ色々理由がありますけどね。理屈を言ったってしょうがないんだけども。
　山梨大学医学部だって、ここ２、３年産科を志望する学生がいないんですよ、医学生が。ひどいじゃないですかね。その産科の先生が本当に一生懸命医者の卵に産科に行きなさいよと言っても来ないんですね。だからこれは・・。

〔参加者〕
　私、医学部にいたんですけどね、どういうふうに学生が言うかというと、二言目にはどの科が儲かりますかというふうに聞くんです。

〔知事〕
　そうですかね。まあ「医は仁術」と言うけれども、もうそうじゃないんですね。今は算術になっちゃったんですね。

〔参加者〕
　やっぱり医者になる目的が人の命を救うこと、という志の部分を教えることだと思います。産婦人科でも「誰もやらんじゃあ俺がやってやらぁ」みたいな人が出てきてもいいのかなというふうに思います。

〔知事〕
　本当ですね。医道というやつですね。やっぱり緒方洪庵という幕末の医者が自分の弟子に諭した言葉に、「医業は人のために生活し、己のために生活せざるをもって医業の本体とす」という言葉があるけれども、幾つかある中のその一つですけれども、まったくそうなんですよね。
　やっぱりお医者さんの大部分は人のために働きますよね、自分を犠牲にして。しかしそういう発想というのは段々少なくなってきましたね、本当に。

〔参加者〕
　それだけじゃなくて、医療をやる立場として産婦人科が減るのは訴訟ですね。そのリスクを若手は嫌ってますね。ある外科医の先生は外科医のなり手もないから手術はできなくなると言っていますし・・。

〔知事〕
　そうですね。外科もいわゆる脳外科とか整形外科ですね、困ったものですよ。

〔参加者〕
　やはり子どもの教育、子どもの教育というふうに言っているんですけれども、結局のところさっきの輝いている科学者じゃないんですけれども、やっぱり輝いている大人とか、この人みたいになりたいというふうな大人がいないと、幾ら正しいことを言ったとしても、やっぱり子どもというのは冷静に見ていますから、そういった態度で判断すると思うんですね。
　そういう中で、まず例えば県庁職員から、あっこういう大人になりたいなというようなモデルとなるような方を（笑い）多く出していただきたいと思います。

〔知事〕
　立派な人、勉強はできなくても・・（笑い）

〔参加者〕
　やっぱり日々の業務に追われたり、ことなかれ主義であったりとか、そういうことではなくてやはり、あっこういう大人がいいなというふうな、そういう雰囲気ですとか人格ですとか、そういうものを少しずつでも私たち大人が醸し出さないとだめだと思うんですけれども、何かそういう県庁の中での教育ですとか、そういうものというのはないのかなと。

〔知事〕
　そうですね、一応色々と研修というのはやっているんですけどね。ただ不祥事件ばかり多くて、この間も何かありましたね。そんなものばかり起きて困りますよ、本当に。

〔参加者〕
　そうなってくると、どうせ大人ってこうなんだなというところで、どんなに子どもに教育をしたとしても、逆に反発のほうが多くなると思うんですよ。ですのでずっと継続できるかどうか分からないんですけども、若い県庁職員からどんどん育てていかれたほうがいいのかなと思いますね。

〔知事〕
　そうですね。それは一番今頭を悩まして、どうもどこか県庁の中のそういう仕組みとか人の育て方とか、そういうところが間違っているんじゃないかという気がしましてね。今

どうしたらいいか考えているところなんですけどね。

〔参加者〕
　県庁職員に育休も男性の方にどんどん取ってもらって、地域の活動に参加してもらうとかどうですか。

〔知事〕
　それはありますね、確かにね。まず消防団に参加しなくなっちゃったんです、最近。困るじゃないですか。消防団には参加しろと今言っているんですけどね。

〔参加者〕
　育休のほうも途中、取る方も・・。

〔知事〕
　育休は取るようになったんだよね。

〔司会〕
　取れるようになっています。

〔参加者〕
　制度はあっても何か雰囲気がやっぱり難しい。

〔参加者〕
　今メディア、テレビのほうで「余命１カ月の花嫁」というのを見させてもらって、うちの奥さんも中央病院で看護師をしていまして、色々そういう話も聞きます。看護師は卒業して、やっぱり２１から２２とかそういう若い年代で働きます。子どもを産むと産休に入り、子どもをみているとそのまま育児のほうに掛かってしまって復帰が難しいということになります。
　そういう命という部分に対して、やっぱりメディアを通じてそういう命の尊さというものを､県のメディアとかでいろんな部分に取り入れて考えさせるようにしていただきたい。先ほど皆さんも言われていたような教育という部分でもう少しメディアで訴え掛けた後に、自分でも何かできるかなと思った時に一歩踏み出せるような機会が何かあればいいと思います。
　高齢化社会という問題を抱えていますので、お医者さんも大変だと思うんですが、それを支えている看護師のほうも色々とやっぱり大変だという部分も自分の奥さんを見ていて感じています。そういう部分でその辺のサポート的な制度というか、そういうものがあればなと思います。

〔知事〕
確かにね。看護師さんは大変なんですよね。これはお医者さんと同時に看護師さんは大変だと思うんですね。それは我々もよく考えていますから、まあ十分なことができるかどうかはともかくとして、またそれをやらなきゃあ看護師さんが確保できないんですよね。それはよく分かっています。

〔参加者〕
産婦人科のことで、私は５人子どもがいるんですが、韮崎の助産院で産まさせてもらったんです。やっぱり命の尊さが分かるように、うちは子どもが生まれる時は、上の子もみんな見て、家族全員で出産に立ち合うことをずっとやってきたんです。
大病院とか、大きな産婦人科に行かないと産めないとか、そういう意識がすごく皆さんあります。昔のようですけど、助産院でできそうな出産というのはいっぱいあるので、助産院の補助とかがあってもいいと思います。

〔知事〕
いや、おっしゃるとおりです。それが一つの解決方策なんですね。産婦人科さんがいないね。助産師外来とか、あるいは院内助産師と言いましてね、院内助産院とか、今助産院もお医者さんと提携しないと子どもを取り上げられないんですよ。だからやっぱり病院の中に助産院があって、例えば韮崎の市立病院、市立病院だって分娩はしませんけれども婦人科の先生はいますからね。だから婦人科の先生と提携をして、その中に助産院を作ってということはできるんですよ。
ただ助産師、助産院というのは赤ちゃんを取り上げるという技術が余りなくなっちゃいましてね。だからみんな自信がないと言うんですよね。だからもう相当教育しなければだめなんですね。それを始めようとしているんですがね。

〔夢甲斐塾 上甲塾長〕
私は皆さんの話を聞きながらはらはらしておりました。もし皆さんがいろんな意味で陳情したら、夢甲斐塾というのは精神が危ぶまれますね。それを一番僕は強く感じましてね、夢甲斐塾は行政に一切頼らない。そして山梨県の期待と希望の星として、こういう人が増えてくれば山梨は良くなるんじゃないと、僕はそういう集団になりたいと思ってね。私の一番の願いなんですよ。
それは多分県に求めることではなくて、まず自分から実践し行動するというのが、人の一番基本じゃないかなと思うので、そういう発言をしてくれるかなって。
夢甲斐塾は、当時の商工労働観光部から頼まれて、決めてからずいぶん部長も課長も変わりました。要するに、産み落とされたけれども誰も責任を持てないという体制の中で、県の事業ってこういうふうに漂流していくんだなと思って、思いながらも、しかし少なくとも県民に対しては、私が引き受けた限りは自分一人であってもやり続けていくというのが引き受けた責任じゃないかなと思って今日までやってきたわけですね。

ここにいる彼が僕に頼みに来た最初の人の鞄持ちだった人なんですよ。彼はこの夢甲斐塾を立ち上げる時の一番の事務方だったですよね。自ら塾生になって、今日至るまでこの夢甲斐塾にちゃんとつながってくれているんですよね。そういう県の職員というのは、素晴らしいと思いましてね。

仕事として産み落とすだけじゃなくて、産み落とした仕事に対して、自分が何らかの意味合いで係わっていこうということで、この７期生に至るまでこうして係わってくれることについて、僕はああすごいなと、こういう職員が増えると県はよくなるぞと、是非そういう人を認めてあげてやらねばと。私の唯一の陳情です（笑い）。よろしくお願いします。

〔司会〕

どうもありがとうございました。最後に知事から今までの感想も含めてあいさつをということになっておりますけれども、本日は夢甲斐塾の例会がありまして、そちらのほうで感想を含め、あいさつすることになっております。ということで今回の知事対話はここで終了させていただきます。大変ありがとうございました。